

梅花歌卅二首[并序] /		
天平二年正月十三日 天平二年正月十三日に、 天平二年正月十三日に、 天平二年正月十三日に、	萃于帥老之宅 帥の老の宅に萃まりて、 そちのおきな ^の いへにあつまりて、 帥の老の宅に集まって、	申宴會也 宴會を申く。 うたげをひらく。 宴会を開く。
于時 時に ときに 時は	初春 ^令 月、 初春の令月にして、 しよしゆんのれい ^い づつにして、 初春のよき月で、	氣淑風 ^和 氣淑く風和ぎ、 きよくかぜやはらぎ、 空気は清く風は優しく、
梅披鏡前之粉 梅は鏡前の粉を披き、 うめはきやうぜんのこをひらき、 梅は鏡前の白粉ように花開き、	蘭薰珮後之香 蘭は珮後の香を薰す。 らんははいごのかうをかをらす。 蘭は飾り袋の香りのように匂う。	
加之 之に加え、 これにくはへ、 加えて、	曙嶺移雲 曙の嶺に雲移り、 あけぼののみねにくもうつり、 曙の峰には雲が行き来し、	松掛羅而傾盖 松は羅を掛けて蓋を傾く。 まつはうすものをかけてきぬがさをかたぶく。 松の木に雲がかかり、まるで薄絹の衣笠をさしたようにである。
夕岫結霧 夕の岫に霧結び、 ゆふべのくきにきりむすび、 夕べの山洞には霧がかかり、	鳥封穀而迷林 鳥は穀に封めらえて林に迷ふ。 とりはうすものにこめらえて、はやしにまどふ。 鳥は霧に囲まれて、林を飛び回っている。	
庭舞新蝶 庭には新蝶が舞い、 にはにはしんてふがまひ、 庭には生まれたばかりの蝶が舞い、	空歸故鴈 空には故鴈が歸る。 そらにはこがんがかへる。 空には雁が北へ帰っていく。	
於是盖天坐地 是に天を盖、地を坐とし、 ここにあめをきぬがさ、ちをしきゐとし、 ここに天を屋根に、地を座席とし、	促膝飛觴 膝を促け觴を飛ばす。 ひざをちかづけ、さかづきをとばす。 膝を交えて、盃を酌み交わす。	
忘言一室之裏 言を一室の裏に忘れ、 げんをいっしつのうちにわすれ、 部屋の皆は言葉を忘れ、	開衿煙霞之外 衿を煙霞の外に開く。 きんをえんかのそとにひらく。 襟を緩めて、心を開こう。	
淡然自放 淡然自ら放し、 たんぜんみづからゆるし、 心は淡々と解き放たれ、	快然自足 快然自ら足る。 くわいぜんみずからたる。 快く満ち足りている。	
若非翰苑 もし翰苑にあらずは、 もしかんゑんにあらずは、 文字によなくて、	何以攄情 何をもちてか情を攄べむ。 なにをもちてかこころをのべむ。 どうしてこの気持ちかが伝えられようか。	
詩紀落梅之篇 詩に落梅の篇を紀すも、 しにらくばくのへんをしるすも、 漢詩に落梅を歌ったものがあるが、	古今夫何異矣 古今それ何ぞ異ならむ。 ここんそれなんぞことならむ。 それは今も昔も同じことだ。	
宜賦園梅 よろしく園梅を賦して、 よろしくゑんばいをふして、 さあこの園の梅を題材に、	聊成短詠 いささかに短詠を成すべし。 いささかにたんえいをなすべし。 歌を詠もうではないか。	

中西進・伊藤博他の著作を参考に、南寿宏が訳す。
家持少年は当時十代、この場を覗き見ていたであろうか。